北海道の国際協力情報紙
であい
vol.77 2016 WINTER
公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC／ハイエック
Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

特集

「高校生が見たベトナム」
―平成27年度高校生・アジアの架け橋養成事業

子どもと一緒にはしゃいで楽しんだ「じゃんけん列車」

北海道国際交流・協力総合センター（HIECC）では、北海道教育大学の大津副学長（日本国際理解教育学会常任理事）による監修及び指導、また開発教育の実践者である開発教育ファシリテーターのご協力のもと、道内の高校生を対象に開発途上国へのスタディツアーを含む人材育成事業を平成22年度より実施。今年度の参加者は札幌だけでなく釧路や函館、旭川など道内各地域から選抜された10名の高校生が2回の事前研修を経て8月にベトナムを訪問し、現地で活動するNGO訪問や、戦争証跡博物館などの見学、またNGOが支援する子どもとの交流などを経験した。

ベトナムの教育事情について話を聞く高校生

ホーチミンで見た光と影

経済発展著しいベトナムの首都・ホーチミン。道路には無数のバイクと車が溢れ、高層ビルが立ち並び、予想していた以上の都会の姿に驚く高校生。街並みを見るだけでは、戦争という歴史を抱えていることや、貧困に苦しむ現実を目の当たりにすることなど全く想像できなかった。

ベトちゃんドクちゃんの分離手術が行われたことで有名なツーゾー病院。そこには、枯葉剤の後遺症で苦しむ子どもたちが療養する施設がある。ベトナム戦争の歴史を風化させないよう展示されたホルマリン漬けの赤ちゃんが入った瓶が整然と並ぶ部屋も見学した。声なき声に胸が締め付けられ、一瞬目を背けたくなる状況でも、過去に起きた事実をしっかり目に焼き付けたいと必死に感情をこらえた。

10人で心を一つに汗だくで踊った「よさこいソーラン」

パワーをもらった子どもたちとの時間

子どもたちに喜んでもらえるよう知恵を出し合ってゲームや踊りを事前研修で準備した。いざ子どもたちを前にすると緊張したが、「一度きりのチャンスだから思いっきり楽しもう!」と吹っ切れると、手を繋いだりハイタッチをしながら、一緒に汗だくになって楽しんだ。「言葉が通じるのだろうか」、「楽しんでもらえるのかな」と不安に思っていたことがまるで嘘のよう。心待ちにしていたベトナムの子どもたちとの出会いからたくさんの元気とパワーをもらった。

日本のNGOから支援を受けながら小学校に通う子どもたちにも出会った。無邪気に笑う子たちの中に笑顔を見せない一人の少年。その表情に最初は戸惑った。「自分たちといる時間は楽しんでほしい!」と少しだけ勉強したベトナム語で話しかけボール遊びをすると、その子の顔に自然と笑みが。「頑張った甲斐があった!」と心から思った。しかし、後で母親が家出をしているという事実を知る。厳しい環境に置かれている子どもたちが、「もっと勉強して家族のためになりたい」と夢を語っていた姿を思い出し、自分たちがいつでも勉強できる環境にいるありがたみを痛感した。自分自身を見つめ直さなければならないことを、ベトナムの子どもたちとの出会いが教えてくれた。

大人数の高校生を前にベトナムでの経験を語る高校生

自分の思いを言葉に乗せて

帰国後は2回の事後研修を経て、5人編成で2グループに分かれ所属する高校で各グループが3回の報告会を実施した。ベトナムで笑い、涙し、葛藤した思いをどう伝えるか。学校の勉強や部活と両立しながら3カ月間かけて完成した原稿に気持ちをこめて話そうとするが、大人数を前に緊張してうまく話せず悔しい思いをしたことも。それでも、一生懸命伝えようとする姿が同世代の高校生の心に響き、涙を流しながら聞く人の姿も。自分たちに大人が伝える以上の言葉の力があることを知った。

8日間のスタディツアー中に学び、感じたことは十人十色。それぞれがベトナムで経験したことを胸に、それぞれの舞台でアジアの架け橋として活躍していくのだろう。

「JICA国際協力エッセイコンテスト」（（独）国際協力機構主催）に参加高校生10名が応募し、優秀賞、審査員特別賞などに3名が入賞しました。

韓国大学生訪日研修団受入事業

平成 27 年 11 月 13 日から 17 日の日程で、引率者等を含む総勢 40 名の韓国大学生訪日研修団が北海道を訪問した。

この事業は、外務省の事業「JENESYS2015」を受託する（公財）日韓文化交流基金からの依頼を HIECC が受け、北海道庁と連携し訪日に係る地方プログラムを実施するもの。韓国大学生全員にホームステイを体験してもらうほか、日本の大学生との交流や道内企業の視察を行った。また、平成 27 年は、日韓国交正常化 50 周年の節目でもあり、韓国大学生と北海道民との交流が相互理解の増進と日韓の一層の交流拡大に寄与した。

訪問団は北海道到着後、先ず北海道庁と HIECC を表敬訪問。HIECC の越前副会長兼専務理事が歓迎の言葉を述べ、次いで、北海道の概要のレクチャーを受けるとともに、赤れんが庁舎などを視察した。その後は、登別へ移動し温泉を体験した。

翌日、札幌へ戻りホストファミリーとの対面式に臨んだ。韓国大学生もホストファミリーも緊張する中、いよいよ対面の瞬間となった。しかし、名前を呼ばれ顔を合わせると、それまでの緊張が一気に解け、双方に笑顔がこぼれた。その後、各家庭に向かいホームステイがスタート。週明けに再集合した際には、ホストファミリーとすっかり打ち解けた様子。別れを惜しみ涙を流す韓国大学生やホストファミリーが散見され、僅かな時間ではあったものの、それぞれが思い出深い時間を過ごした様子が伺えた。

日本の大学生との交流は、小樽商科大学のご協力をいただき実施した。穴沢国際交流センター長から歓迎の言葉を受けた後、日本人学生によるキャンパスツアーを実施し、グループに分かれ学食も体験した。午後からは、各グループでディスカッションを行い、日韓学生が活発に意見を交換し相互理解を深めた。

大学交流を終えた一行は、北海道を代表する企業の一つであるアミノアップ化学を視察し、北海道での全プログラムを終了。翌日、大阪へ向かった。

平成 27 年度

「国際交流 in 積丹町」&
在北海道外国公館・通商事務所等協議会
「学校訪問事業」（11 月 21 日～ 22 日　積丹町）

神威岬をバックに留学生全員で記念撮影

今年で15回目となる「国際交流in 積丹」（主催 ： 積丹町教育委員会）が11月21日（土）と22日（日）の2日間で行われ、イラン、スリランカ、オランダ、オーストラリア、フランス、中国、韓国、ブラジルなど11か国12名の留学生が同町を訪れた。また、美国中学校では在北海道外国公館 ・ 通商事務所等協議会が行う「学校訪問事業」も併せて行われた。

ビーズリー領事のクイズで楽しく学べる内容に

美国小学校4年生はオーストラリアのゲームに挑戦

土曜日は留学生が楽しみにしていた積丹町内見学。観光シーズンでなくても、神威岬から見た神秘的な夕陽に思わず息を飲み、温泉体験では入浴後のコーヒー牛乳を飲む庶民文化も嗜んでいた。宿泊先に到着すると、畳の部屋や新鮮な海の幸に感激し、町の方の歓迎の心に触れ、すっかり積丹町の魅力の虜になっていた。

2日目の学校訪問では、留学生12名が町内の小学校4校と中学校1校に分かれて訪問。また、学校訪問事業として在札幌米国領事館のハービー ・ ビーズリー領事が美国中学校を訪問し、米国と日本の繋がりや、総領事館業務などについてお話をした。中学校に訪問した留学生3名は各学年に分かれ、調理やゲームを通して交流。留学生と学生の間に英語や日本語の会話が自然に発せられ、相互理解が深められていた。

美国小学校では留学生が用意したそれぞれの国の遊びに子どもたちは大はしゃぎ。廊下まで笑い声や元気な声が響き渡り、すぐに「友だち作り」に成功していた。子どもたちは留学生が来るのを何日も前から心待ちにして準備を進めていたそうで、楽しみにしていた気持ちが元気な声や笑顔から溢れていた。

留学生は町の魅力や人々の優しさに触れ心身ともにリフレッシュした様子で、一方、子どもたちは留学生との楽しい時間を通しそれぞれの国を身近に感じる貴重な機会となっていた。

「北海道のインバウンドと多文化共生のこれから」

多文化共生推進ワークショップ in 北海道～多文化共生のための政策提言事業

12月8日（火）かでる2・7（札幌）で、「北海道のインバウンドと多文化共生のこれから」と題しワークショップが行われた。

本事業は、2006年3月に「地域における多文化共生推進プラン」等が総務省より発表されて10年の節目となることから、（特活）多文化共生マネージャー全国協議会が、これまでの多文化共生の取組みをふり返るとともに、全国各地で多文化共生ワークショップ等を開催し、新たな課題や検討事項をまとめ、国へ政策提言するため実施。北海道ではハイエックが共催団体となり、一般道民をはじめ自治体や国際交流団体等の職員が参加した。

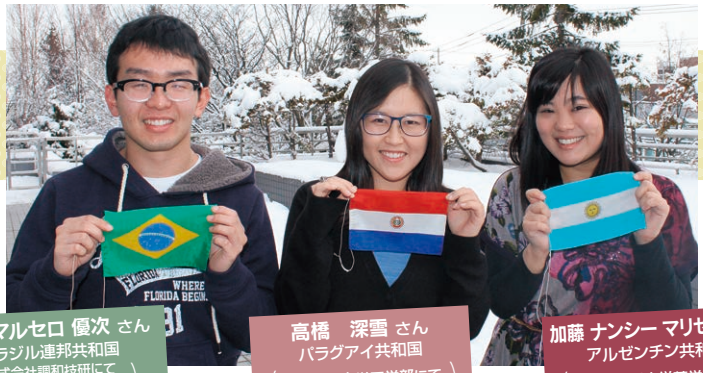
今回のワークショップでは、北海道でも年々急増する「訪日外国人観光客（インバウンド）」に焦点を当てた。道内の約2.3万人の在住外国人に加え、2014年度の来道外国人観光客数は150万人を超え、その10年前の2004年度は28万人と、この10年で5倍強に増加しているとともに、道内観光地を中心とした地域経済とも密接に関係している。

講師の田村氏は、基調講演の中で、訪日外国人向けの「インバウンド」施策と外国人住民との共生をめざす「多文化共生」施策とを、切れ目なく繋ぐことが大変重要であり、外国人住民にとって暮らしやすい地域を創造することができれば、人口減少に悩む地域にとって新たな選択肢が開けるとともに、地域の魅力を世界に発信し、観光客や新たに定住する外国人が増える地域になることと直結するとまとめた。

基調講演に加え、主に冬期間、世界各国からスキーヤーが集まる倶知安町の取組みや、在住外国人として北海道の魅力を海外へ発信している方に、外国人が感じる北海道の魅力とは何かなどについての事例紹介がなされるとともに、参加者同士のグループワークも行った。

さっぽろ研修員・留学生日記

南米とは全く違う環境の北海道で新しい夢を見つける



日諸 マルセロ 優次 さん
ブラジル連邦共和国
（株式会社調和技研にて「自然言語処理を応用したシステム開発」を研修）

高橋　深雪 さん
パラグアイ共和国
（北海学園大学工学部にて「建築設計」を研修）

加藤 ナンシー マリセル さん
アルゼンチン共和国
（北海道薬科大学薬学部にて「生薬学」を研究）

平成27年度ハイエック受入の北海道海外移住者子弟留学生は4月に、北海道海外技術研修員は6月に来道し、それぞれの専門の勉強をスタート。3月には全てのプログラムを終える。

自分たちのルーツ・北海道

「両親の国だから一度見たいと思っていた」と語る加藤さんのルーツは夕張市。祖母が学校にスキーで通っていたことや、市のマラソン大会で優勝した祖父が、トロフィーが大きすぎて南米に持って行けなかったという話を幼少期に聞いた。来道後、大学のプログラムで夕張に行く機会があったが、祖父母から聞いていたイメージと今の街の姿が異なり、「切ない気持ちになった」と率直に感想を語っていた。父方の祖父は苫前町、母方の祖母は余市町出身の日諸君は、祖父からいつも雪の話を聞かされていた。秋に苫前町を訪れたが、札幌とは違う地方の町を見て、北海道で冬を過ごす厳しさを身に染みて感じたそう。高橋さんの祖母は月形出身。パラグアイの大学を卒業後、「南米とは違う生活を体験したい」と思い北海道での研修を希望。日本での生活は便利だと感じる一方、祖父母が南米での生活に適応したことにある意味驚きを感じたと自身の経験と比較していた。

北海道で学んだことから生まれた目標

大学で建築設計を学ぶ高橋さんは、「ゼミで担当教授が的確なアドバイスをし、さらに院生や仲間同士が意見を言い合える環境で、様々な気付きがあります」と語り、デザインに関する視野を広げられていると日々実感。帰国後はパラグアイの設計事務所での就職を希望している。「アルゼンチンの国立大学では機材が揃わず、実験できる日もあれば見学だけの日も。でも、日本の大学では機材も環境も整っているのに、日本の学生が“当たり前”と感じているのがもったいない」と自国との違いを日々実感する加藤さん。「留学期間中に薬品の分析機器も多少使いこなせるようになり、将来の職業の選択肢が増えた」と希望溢れる表情で話していた。日諸君は北海道に来る前まで大学院への進路を迷っていたが、「自然言語処理と少数言語を組み合わせた研究をしたいという思いが日本に来てから強くなり、大学院を目指す気持ちが固まった」と将来の具体的な目標を決めたとのこと。

自分のルーツである北海道に来ることで、今後の新たな自分の目標や夢を手繰り寄せた3人。成長した姿で南米に戻り、北海道で出会った人々の期待を背に、それぞれの分野でますます活躍していくに違いない。

青年海外協力隊
50周年記念イベント

網走と世界をつなぐ国際協力セミナー

（10月8日（木）網走市）

小川局長の講演を真剣に聞く学生たち

北海道に超大型台風が上陸した10月8日（木）、同セミナーを開催。第一部は東京農業大学で学生を中心に、第二部はオホーツク・文化交流センターで一般の方を対象に行った。

第一部は、同大学を卒業し青年海外協力隊に参加した道山マミ氏（合同会社「大地のりんご」代表）、中村愛氏（網走市役所職員）の二人のパネルトークを行った。同じ大学の先輩・後輩の関係ならではという場面も多く、心通った時間となった。先輩であるパネリストから後輩たちへのメッセージを伝える場面では、東京農業大学の「師弟関係にも似た同志」としての深い愛を感じさせられた。青年海外協力隊事務局の小川局長からは「世界へ飛び出せ！東京農大生」というテーマで話があり、募集説明会では聞くことができないより具体的な制度や、時代とともに変化しつつある協力隊事業の変遷が紹介された。

現地での生活と国際協力体験を語る道山氏

第二部は、一般の方々を対象に道山氏と中村氏から、青年海外協力隊の体験談を話していただいた。道山氏と中村氏の派遣時期は20年の開きがあり、活動場所や職種、現場で関わった人々も異なるが、「何事も諦めずに取り組むこと、向き合い続けること」が大切であるという共通したメッセージがあり、二人が東京農業大学オホーツクキャンパスで培った底力を感じた。参加者からは、「今日の話はわかりやすく感動的だった。本当にありがとうございました」などの感想があった。今回のプログラムは、長年に渡りJICAボランティアが築き上げてきた信頼、そして帰国隊員が今も燃やし続ける「協力隊魂」を感じさせる青年海外協力隊50周年にふさわしい内容となった。

国際都市・旭川？

11月1日（日）
旭川市国際交流センター

設立25周年を迎えた旭川市国際交流員会が、旭川市内フィール旭川7階にある旭川市国際交流センター／交流ラウンジを会場にし、旭川に暮らし、海外に留学・在住経験がある高校生や大学生、また社会人をパネリストに迎え、「国際都市とは何か？」をテーマに語り合うイベントを開催した。

25周年と言う節目を迎え、若い世代の前向きな意見をもとに、今後の旭川の展望を様々な視点で自由に語るイベント。「旭川の魅力は何か？」という質問では、四季が明確にあることや変わらない街並みが与える安心感があるなどの意見が。中国からの留学生は、小さい頃に旭川市内に留学中の父を訪ねた時に出会った人々の優しさが忘れられず、自分の留学先として旭川を選んだというエピソードを披露。「“また来たくなる街”という魅力がある」と語っていた。

逆に、国際都市として不足している部分という問いに対しては、駅前の商店街の魅力不足や市内の交通の不便さなどの声もあったが、中心部からすぐに田園風景や豊かな自然が残っている郊外に簡単にアクセスできる利点があるとの声も。今あるものを見つめ直し、それを強みに変えていくことが大切なのではという意見があった。

約1時間のディスカッションを通して、パネリスト自身が「旭川には観光や食などあり、まだまだポテンシャルがあることに気付いた」、「自分自身が地元のことを学び、旭川の魅力をもっと発信していきたい」と語り、登壇者も来場者も旭川の魅力を再確認し、もう一度見直す機会となっていた。

海外経験がある若い世代がパネリストとして登壇

国際交流会 in 当別町立弁華別中学校

（12月10日（木）　当別町弁華別）

昭和22年に開校した弁華別中学校が、今年度をもって68年の歴史に終わりを告げる。現在中学校で学ぶ生徒9人が札幌市内に住む留学生3ヵ国4名を迎え、餅つきなどを通して楽しいひと時を過ごした。

生徒代表による英語での歓迎挨拶でスタートし、次に留学生がパソコンを使ってそれぞれのお国を流暢な日本語で紹介。生徒たちは留学生が用意した写真やクイズに積極的に反応し、楽しみながら発表を聞いていた。

中学生の掛け声に合わせて餅をつく留学生

3ヵ国の国旗を囲んで全員で記念撮影

その後、2グループに分かれ杵と臼で餅つき体験。留学生にとって初めての餅つきとなり、予想以上の重労働に汗をふきつつ、時折休憩を挟みながら杵を振っていた。また、調理室ではお雑煮やあんこ餅も調理し、昼食は豪華なお餅料理のフルコースに。全員で力いっぱいついたお餅は弾力が強く、手料理を口いっぱいに頬張りながら、留学生を囲んで各テーブルで会話が弾んでいた。

留学生にとっては全校生徒が9名ということや閉校ということが驚きだったようだが、今回の国際交流を楽しみにしていた中学生との出会いが、大学とは違う日本を知る素晴らしい機会になったと感想を語っていた。また、生徒たちは今回の経験を生かし、弁華別の誇りを胸に新しい舞台で未来に羽ばたいていくのだろう。

公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC／ハイエック

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館
発行日：2016年2月5日
TEL. 011（221）7840　FAX. 011（221）7845　http://www.hiecc.or.jp
E-mail：intc@hiecc.or.jp（交流・協力部）
印　刷：岩橋印刷株式会社